

ぶくく長々火の目小僧(上)

鈴木三重吉



これは、昔もく大昔のお話です。その時は、今とすつかり違つて、鼠でも靴をはいて歩いてゐました。そして、猫を片はしから取つて食べました。驢馬も剣をつるして威張つてをりました。鶏は、しじゅう、犬を追つかけて廻していちめてをりました。そんな風に、何でも物が逆さだつた時分のことですから、今から言へば、それこそ昔もく大昔の、そのまたすつとく昔のお話です。だから、いろんな可笑しなことばかり出て來ます。でも、どれもこれも決して嘘ではありません。その頃、或國の王さまに、それはく美しい、そして、また大變に賢い、いゝ王女が一人ありました。そんな王女のことですから、世界中の王さまや王子が、だれもかれもみんなお嫁に欲しがつて、入り代りく絶えず方々から貰ひに來ました。併し王女は、どんな立派な人から貰ひに來られても、必ず厭だくとやつて、いちく撥ねつけてしまひました。



世界中の王さまや王子たちは、それでも、まだ懲りないで、代るくどんく出かけて來ました。王女はしまひには、もう煩くてくたまらなくなりました。それで、とうくお父さまの王さまに向つて、
「では、だれでも、三晩の間、一寸も眠らないで、私をお部屋の外へ出さないやうに、おつと番をして見せる人がありましたら、その方のお嫁になりませう。」と言ひました。
王さまは早速そのことを世界中へ知らせになりました。その代



ました。
ところが、夜になつて、王女のお部屋へ通されて、しばらく王女の顔を見てゐると、どんな人でも、みんな、ついうとく眠くなつて、いつの間にか、ぐうく寝込んでしまふのでした。そんな

り、もし途中で少しも居眠りをする、すぐに斬り殺してしまふから、そのつもりで試しに入らつしやいとあ言ひになりました。
すると方々の王さまや王子たちは、何だ、そんなことなら、だれにだつて出来るさと言つて、わしもくと、どんく押しかけて來

なわけ、来る人々が、一人ものこらず、みんな王さまに切り殺されてしまひました。すると、或王さまのところに、鹿のやうにきれいな、そして鷹のやうに勇しい、年わかい王子がありました。

この王子が、王女のその話を聞いて、私ならきつと眠らないで番をして見せる、一つ行つて、試して来ようと思ひました。

併し、こちらの王さまは、もしも王子が、うつかり眠りでもしたら大變ですから、いや／＼それはいけないと言つて、どうしてもお許しになりませんでした。

さうなると、王子はなほさら行きたくて、毎日／＼、

「どうか行かせて下さいまし。たつた三晩ぐらゐのことですもの、必ず眠りはいたしません。」と言ひながら、しつこく王さまに、附き纏つて引ツきりなしにねだりました。

それだものですから、さすがの王さまも、とう／＼根負けをなすつて、それでは、どうなりと好きなやうにするがいと、爲方なしに仰いました。

王子は大よろこびで、早速、巾着へお金をどつさり入れて、それから、よく切れる立派な劍をつるすが早い、お供もつれないで、大勇みに勇んで一人て出かけて行きました。

二

王子は、遠い／＼長い道を、どん／＼急いで行きました。すると、二日目に、途中で一人の肥つた男に出會ひました。その男は、餘つ程體が重いと見えて、足を引きずるやうにして、のっそ

／＼歩いてをりました。

「もし／＼、お前さんは、どこまで行くのです。」と、王子はその男に話しかけました。

「私は、爲合せといふものを探しに、世界中を歩いてゐるのでございます。」と、その肥つた男が答へました。

「一たいあなたの商ばいは何です。」と王子は聞きました。

「私には別にこれといふ商ばいはございませぬ。たゞ人の出来ることがたつた一つ出来るだけでございます。」

「は、ア、では、その人に出来ないこと、い

たいなら、すつかり腹の中へ這入るくらゐ膨れます。」

肥つた男はかう言つて、にや／＼笑ひながら、いきなり、ぶら／＼膨れ出して、瞬く間に、往來へ一ぱい支へるくらゐの、大きな／＼大男になつて見せました。

王子は、びつくりして



ふのはどんなことですか。」

「なに、それも大したことではございせん。私はぶく／＼といふ名前前で、いつでも勝手なときに、ひとりてに、體がゴムの袋のやうにぶく／＼膨れます。まづ、一聯隊ぐらゐの兵



「ほら、これは重寶な男だ。どうです、今日から私のお供になつてくれませんか。私も丁度、お前さんと同じやうに、爲合せを探して歩いてゐるのだから。」とためしに、聞いて見ました。

すると、ぶく／＼は喜んで、「どうぞお供につけて下さいまし。丁度いゝ幸ひでございます。」と言つて、すぐに家來になりました。

二人は、それから、しばらく、てく／＼歩いて行きますと、今度は向うから、全て棒のやうに瘦せた、ひよろ長い男が出て來ました。

王子は、「おや、變な奴が來たぞ。」と思ひながら急いで側へ行つて、「もし／＼、お前さんはどこまで行くのです。」と、聞きました。

「私は世界中を歩くのです。」と、その棒



ちをしますと、する／＼と天まで手が届きます。それから一と足で、ひよいと一里先まで跨げます御覽なさいまし、この通りです。」

棒はかう言ふが早いか、忽ちする／＼と、體を延ばして、「おやッ」といふ間に、もう、高い高男がゐたものだ」と、すつかり感心して、

「もし／＼長々さん、どうぞ、これから私のお供になつてくれなにか。」と言ひました。

「へい／＼、これは願つてもない幸ひでございます。どうぞ、お供をさせて下さいまし。」と、棒は大喜びで、すぐに王子の家來になりました。

王子は、それから二人をつれて、また、どん／＼歩いて行きました。そして、間もなく、ある大きな森の中へ來ました。



い雲の中へ、頭を突つ込んでしまひました。そして、ひよい／＼ひよいと五足六足歩いたと思ひますと、忽ち五六里も向うへ飛んでゐました。そして、いきなりまたひよい／＼と、瞬く間に目の前へ歸つて來ました。

王子は、「いや、これは便利な



すると、そこに、だれだか一人の男がゐて、ぐるりの大きな木を引きぬいては、一つところへどん／＼積み上げてをりました。

王子は、

「もし／＼、それを積み上げてどうするのです。」と、聞ききました。

すると、その男は

「なアに、たゞ目から火を吹いて、この丸太を一どきに燃やすんですよ。」と言ひながら、おつと、目をすえて、その山のやうに積み重ねた木の幹を、睨みつけました。すると、両方の目の中から、しゅう／＼と、長い／＼焰が吹き出して、瞬く間に、それだけの丸太をすつかり灰にしてしまひました。

「ほう、これも随分變つた人間だ。どうです、私のお供になりませんか。」と王子は言ひました。

「はい／＼、どうぞお願ひいたします。」と、その男もすぐに家來になりました。

この男は火の自小便といふ名前でした。

三

王子は、こんな珍らしい男を三人まで家來にかゝへたので、大得意になつて、にこ／＼笑ひながら、みんなの先に立つて、またどん／＼と歩いて行きました。

その代り、これまでと違つてその三人を養ふのに、それは／＼大さうなお金がかゝりました。

だつて、火の目小僧と長々との二人は、たゞ當りまへの人が食へるだけしか食へませんでした。



もう一人のぶく／＼は、ものを食べ出すと、ずん／＼ずん／＼いくらでもお腹が廣がるのですから、それは／＼食べるも／＼、一度に牛肉の千貫目や麵包の千本位は、どこへ這入つたか分らないくらゐでした。それを、腹一ぱい食べさせるには、とても一通りのお金ではすみませんでした。併し王子は、一寸も厭な顔をしないうて、いくらでも、食べただけ食べさせて、どん／＼お金を拂ひました。

そのうちに、王子は、やつとのことで、例の王女のゐる町へ着きました。

王子はそのときはじめて、自分が、はる／＼こゝまで出て来たわけを三人に話して聞かせました。そして三晩とも眠らないで、ちやんと番をしてのけたいものだ、そして旨く王女をお嫁に貰つたら、そのお祝ひに、お前たちにはどつさり御褒美をやると言ひました。

三人は、それを聞いて、

「そんな、美しい王女なら、ぜひ／＼お賞ひなさいまし。それに、これまで、だれにも出来なかつたことをして見せませば、世界中の人に大威張りに威張れます。私たち三人も、一生けんめいにお手つだひいたしませう。」と、勇み立つてかう言ひました。

王子は、早速三人に、立派な着物を買つて着せました。そして夜になると、四人ですぐに王さまの御殿へ行つて、どうか私に、王女さまの番をさせて下さいまし、と申し込みました。

王さまは、快く、王子と、家來とを一間にお通しになりました。王子はその前に三人に向つて、どんなことがあつても、決して私がだれだといふことを人に喋つてはいけない、それから三人がいざといふと、おきに延びたり、ぶく／＼膨れたり、火を吹いたりするといふことは、堅く



秘密にしておくやうに、しつかり言ひ含めておきました。

王さまは、王子に向つて、

「では試しに番をして見るがよからう。併し、もし、うっかり居眠りをして、王女を部屋から通がすと、早速お前たち四人の命を取るが、それでもいいか。」と念をお押しになりました。

「はい、それはよく承知してをります。」

と王子は答へました。

王さまは、よせばいいのと言はないばかりに、にた／＼お笑ひになつて、

「それでは、こちらへお出でなさい。」

と仰りながら、早速王女のお部屋へおつれになりました。

すると、王女は、にこ／＼して出て来て、愛想よく王子を迎ひ入れました。

王子は、その王女があんまり美しいので、目がくらんで、しばらくは、ぼんやりして立ち盡し

てをりました。

王女は、

「どうぞ」と言つて、一ばんきれいな椅子のところへつれて行きました。

そのうちに、王さまは、二人をそこへおいて、あちらへ行つておしまひになりました。

その間に、ぶく／＼は、こつそりとこちらへ出て来て、王女のお部屋の戸の外へかゞまりました。それと一しよに、長々と火の目小僧とは、そつと外へ廻つて、お部屋の窓の下へ隠れてをりました。



王女は王子に向つていろんなお話しをしました。王子は、そのお相手をしながら、一生けんめいに、王女のそぶりに氣をつけてをりました。

すると、やがて王女は、ふいと話を止めて、そのまゝしばらく黙つてしまいました。そして、しばらくたつと、

「あゝ、眠たい。なんだか、真つ赤なものが、もうツと臉の上へかぶさるやうな氣がするわ。御免下さい。」

と、半分ひとりごとを言ひながら、いきなり長椅子の上へ横になつて、さも眠さうに目をつぶつてしまいました。

四

王子は、それでも決して油断をしないで、ぢつと、王女の様子を見てをりました。王女は間もなく、すや〜と寝入つてしまいました。

王子は、その長椅子のそばのテーブルへ行つて、肘を突いて、手の平で脛をさへながら、目ばたきもしないで王女の顔を見つめてをりました。

すると、そのうちに、王子は、だん〜と、ひとりてに臉が重くなつて、いつの間にか、ついこくり〜と居眠りをしはじめました。

ぶく〜や、長々や、火の目小僧は、さつきから、一生けんめいになつて、部屋の中の様子に耳をすましてをりました。



ところが、ちやうど王子が眠りかける頃になると、この三人も、同じやうに、眠けがさして、とう〜とそこへこんだなり、うと〜と寝てしまいました。

王女は王子がぐつすり寝入つたのを勘づくくと、にっこり笑つて、そらツと、起き上りました。實は、さつきから、寝たふりをして王子が寝入つてしまふのを狙つてゐたのでした。

そして起き上るとすぐに、いきなり、ひよいと小さな鳩になつて、こつそり窓から飛び出しました。

今までわざとお話しをしないでゐましたが、王女は

ちやんと、かうい

やり損ねてまんまと火の目小僧と、長々と、見つかつてしまいました。

それは、鳩になつて、窓から飛び出すはずみに、暗がりの中に、こぼんでゐた、長々の頭の髪

へばちりと、羽根をぶつけたからでした。長々は、びつくりして、ひよいと目を開けて、

「おや、しまつた。だれか逃げ出したぞ。」と、嗚鳴りました。火の目小僧は、おどろいて目を開



ふ自由自在な魔法の術を持つてゐるのでした。これまで、どんな人が番に來てもみんな王女を遁がしたわけが、これですつかりお分りになりましたでせう。

ところが、今夜に眠つて、王女はつい

けて、

「どつちだ〜」と言ひながら、目の玉に力を入れて、ぢいっと、四方八方を睨み廻しました。すると、そのたんびに目の中から、しゅっと、長い〜焔が飛び出しました。それで行く通ひかけてゐた鳩は、忽ち二つの翼を真つ黒に焼きこがされてしまひました。

鳩はびつくりして、ぢきそばにあつた、高い〜木の先へとまゐりました。さうすると、長々は、たちまちする〜と體を延ばして、ひよいと、兩手でつかまへてしまひました。

鳩は爲方なしに、もとの王女の姿になつて、長々につれられて、お部屋へ歸つて行きました。そんなことは一寸も知らないで、ぐう〜寝てゐた王子は、長々に揺り起されて、びつくりして目をさました。

王女はこんなわけで、とう〜その晩は逃げ出すことが出来ませんでした。

翌る朝王さまは、王子が、ちやんと、王女の番をして、昨夜のまゝ、お部屋に坐つてゐるのを見てびつくりなさいました。

併し、ともかく、王女を遁がさないで〜と晩中番をしたのですから、どうするわけにも行きませんでした。

王さまは爲方なしに、王子たちを丁寧におもてなしになつて、その晩もう一度番をさせて御覽になりました。

さうすると、その晩も、王子は、またうと〜と眠つてしまひました。長々と、ぶく〜と、



火の目小僧の三人も、やつぱり同じやうに居眠りをしてしまひました。

王女は、それを見すまして、今夜も、また鳩になつて、室から飛び出しました。

すると、やはり同じやうに、長々の頭にぶつかつて、火の目小僧に羽根を焼かれてしまひました。そして、すぐに長々につかまつてしまひました。

王さまは、翌る朝になると、またびつくりなさいました。

そんなことで、三日目の今夜

また王女がしくじらうものなら

もういよ〜、たつた一人の、

大事な王女を、どこのだれとも

分らない、あの若ものに取りられ

てしまふのですから王さまも、

これは油斷がならないと思ひ

お言ひわたしになりました。

王女は、

「畏りました。今晚こそは、きつとあの人たちを負かしてやります。」と言ひました。(つづく)



になりました。

それで、王女を、こつそりと脇

へお呼びになつて、

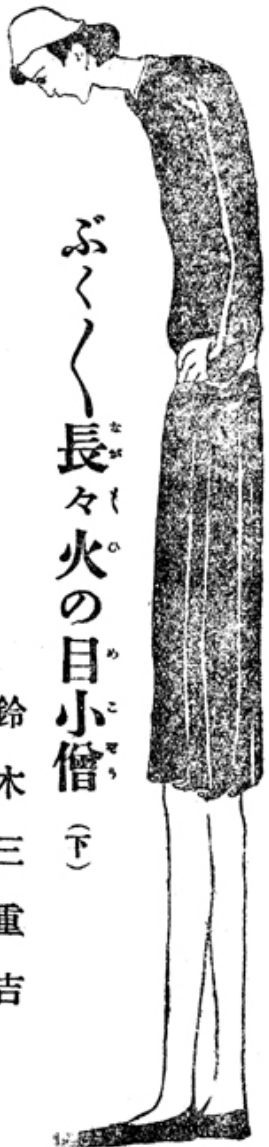
「今晚は、魔法の奥の手をすつかり

出して、必ず上手に逃げ出しておく

れ。もし、しくじつたら、お前も

たゞではおかないぞ。」ときびしく





ぶくくく長々火の目小僧 (下)

鈴木三重吉

そんなわけで、今晚うっかり仕控つたら、それこそ大變だといふので、王さまはひどくびくびくして入らつしやいました。

その間に、こちらはこちらで、王子はまた「ぶくく」と「長々」と「火の目小僧」の三人を集めて、同じやうに、こつそりと、今晚の手くばりを極めました。

「それでは、今晚もしつかり働いておくれよ。いゝかい。下手をすると、私ばかりではない、お前たち三人の首も飛ぶのだよ。その代り、甘くやれば、これでいよゝ王女が貰へるのだ。」

王子は、一生けんめいになつてかう言ひました。
長々たち三人は、

「はい〜大丈夫でございます。どうぞ安心して入らつしやいませし。」と、大威張りですましてをりました。そのうちに、やがてすつかり日がくれました。



王子は、それと一しよに、急いで王女のお部屋へ行つて、昨夜と同じやうに、王女と向き合つて、椅子にかけました。王子は、もう今晚こそは、どんなことがあつても眠らないつもりで、息をもしずに、じつと王女の番をしてをりました。

すると王女は、しばらくたつと、また、この前のやうに、

「あゝ眠い〜。まあ、

どうしてこんなに眠くなるのでせう。何だか、真

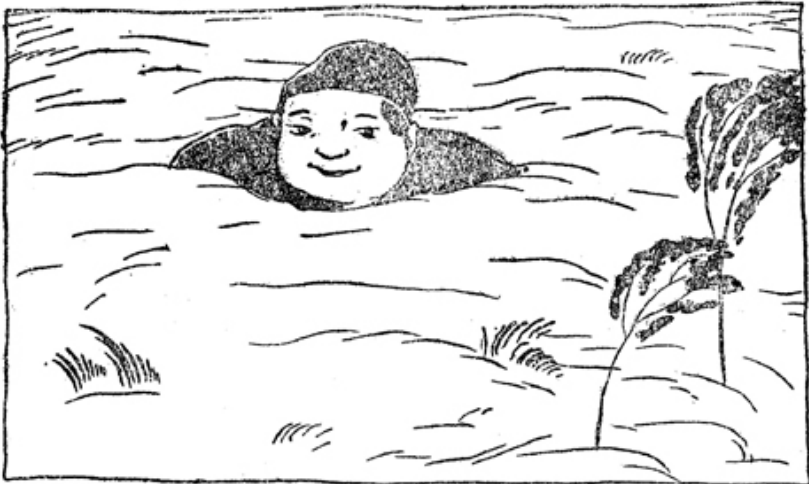
つ赤なものが、もうつと、兩方の目の上にかぶさるやうな気がする

てしまひました。王子は、今晚は、その手に乗るものかと思ひながらタイプルに兩肘を突いて、鷹のやうに目を光らせながら、息を殺して、一生けんめいに王女の顔を舐すゑてをりました。

た。
すると、そのうちに、王子はひとりてに、験が重たくなつて、とう／＼今晩もそれなり、うとうと寐込んでしまひました。
さうすると、丁度同じときに、あれほど威張つてゐた、長々や、ぶく／＼や、火の目小僧も、みんな一度にこくり／＼と居眠りをはじめました。
王女は、さつきから、上手に寝たふりをして、王子たちが寝入るのを、じつと待ち狙つてゐたのでした。そのうちに、王子は、もうぐう／＼と鼾をかいて、全て石のやうに眠り込んでしまひました。
王女はそれを見ると、にこ／＼笑ひながら、そうつと起き上りました。そして今度こそは、だれにも感づかれないやうに、ひよいと小さな繩に化けて、すうつと窓から飛び出しました。
ところが、運悪く、今晩も、そのはずみに、ひよいと、火の目小僧の鼻の先に撲つかりました。火の目小僧はびつくりして、
「おや、しまつた。逃げたぞ。」と言ひながら、いきなりしゆう／＼と、兩方の目から火を吹きました。
すると蠅は、忽ちひらりと小さな魚に化けて、向うの泉の中へどぶんと飛び込みました。
火の目小僧はそれと見届けて、大急ぎで長々とぶく／＼と王子とを呼び起しました。
みんなはびつくりして、はね起きて、火の目小僧と一しよに、大急ぎでその泉のそばへ駆けつけました。



行つて見ると、その泉といふのは、全く底も見えない程の、それは／＼深い深い泉でした。
すると、長々は、
「何に、己がつかまへて見せる。」と言ひながら、早速、水の中へ頭を突つ込んで、する／＼と體を底まで延ばしました。そして兩手でもつて、水の底を隅から隅まで残らずかきさがして見ました。ところが、魚はどこへ隠れてゐるのか、いくら掻きまはしても、さつぱり見附かりませんでした。
ぶく／＼はそれを見て、
「あ／＼お退きよ。さ、



ことがある。」と言ひながら、長々をもとの體に縮ませて、どぶんと泉の中へ這入りました。そして、いきなり、ぶく／＼と體をふくらませて、とう／＼泉一ぱいにふくらんでしまひました。
ですから、水はどん／＼上へ溢れて、大水のやうにあたり一ぱいに廣がりました。
王子とあとの二人は、その水の中を生けんめいに探し廻りました。併し魚はどこへ行つたものか、いくらさがしても、影も姿も見えませんでした。





すると、火の目小僧は、いれつたがつて、
 「あゝ〜駄目だ〜、ぶく〜さん。今度は己だ」と言ひました。
 ぶく〜は爲方なしに、急いで體を縮めました。それと一しよに、水は一どに、もとの泉の中へ歸りました。

火の目小僧は、水がすつかりもとのところへ這入つてしまふと、
 「さあ、來た。」と言ひながら、大きく目を刺いて、じいつと泉の上を睨みつけました。すると、二つの目からは、例のやうに、長い燐がしゆう〜と飛び出しました。
 火の目小僧は、息をもつかないで、いつまでもじいつと、睨みつゞけに睨んでをりました。てすから、しまひには泉一ぱいの水が、その燐でぐら〜と沸き立つて、丁度、大釜のお湯が吹きこぼれるやうに、じゆう〜じゆう〜と、土の上へ吹き上つて來ました。
 そのうちに、やがて、小さな一匹の魚が、半煮えになつて、ひよこりと、こちらへ匆ね上りました。

魚はもう熱くて〜堪らないので、土に觸れるとすぐに、思はずもとの王女の姿になりました。
 王子は大よろこびで、その王女の側へかけつけて、
 「どうです、とう〜三晩ともちやんとつかまへましたでせう。では、お約束の通り、いよ〜あなたは私のものですわね。」と、念を押しました。
 王女は、眞つ赤な顔をして、
 「こんな私でも、よろしうございませば、どうぞお伴れになつて下さいますし。お父さまも、



う諦めて、あなたの仰る通りになりますでせう。」と言ひました。
 王子は、そのときはじめて、

「實は私は、
 これ〜から
 いふ王子で
 す。」と言つ
 て、自分がだ
 れかといふこ
 とを話しまし
 た。



心してをりま
 した。それが
 立派な王さま
 の王子だとい
 ふのですから
 それこそもう
 何一つ申し分
 があらう筈は
 ありません。
 王女は大よろ
 こびで夜が明
 けるとすぐに
 王さまのところへ
 行つて、昨夜のこ

王女は、そ
 れを聞かない
 先から、だれ
 とも分らない
 その王子の立
 派な人柄に内々感
 とをすつかりお話しいたしました。
 すると王さまは、そのたつた一人の王女を、知らない人にくれるのが惜しくて〜たまらない



ものですから、王子に會ふと、王さまらしくもなく、二枚舌をつかつて、

三四

「いや／＼あの子はだれにもやることは出来ない。」と、大怒りに怒つてかう言ひました。併し王子は、そんな嘘つきな王さまには相手にならないで、早速三人の家來に言ひふくめて、王さまの隙間を狙つて、王女を無理やりに引つかへさせて、大急ぎで御殿を出て行つてしまひました。

二

王さまは、ふと氣がつくと王女がいつの間にかゝなくなつてゐるものですから、

「あや、これは大變だ。あの四人のものが、さらつて行つたに違ひない。すぐに追つかけて奪ひかへして來い。さあ行け、早く／＼。」と眞つ赤になつて命令を下しました。

すると、王さまの兵たいは、

「そら行け。」と言ふが早いか、何千人が、一度に馬に飛び乗つて、全て大風のやうに、ひゆうひゆうと駆け出して行きました。

王子たちは、王女の手を引いて、もうかなり遠くまで逃げました。

すると、やがて、急に後の方で、ぼか／＼ぼか／＼と、大ぜいの蹄の音が聞え出しました。

王子は、どん／＼走りながら、

「あい／＼、何だらう。」と三人の家來に言ひました。

「あや、兵たいのやうですよ。あ、兵たいだ／＼。馬に乗つた兵たいが大風のやうに飛んで來ます。」と、火の目小僧は、後を見るなりかう言ひました。

王女はそれを聞いて、

「では、きつと、お父さまの兵たいがあなた方を殺しまゐりましたのでございませう。私、いことがございます。一寸お待ち下さいまし。と息を切らしながらかう言つて、王子たちに手を放して貰ひました。

三

さうしてゐるうちに、騎兵は、「うわあッ」と関の聲を上げて、もう王子たちのちき後まで追ひつめて來ました。

「王女は、もしも王子に怪我があつては大變だと思ふものですから、大急ぎで、かぶつてゐる顔かけを引きはなしました。そのとき丁度、風は、兵たいの方へ向けて吹いてをりました。王女はその顔かけを急いで後へ投げつけて、

「さあ、生えてくれ。この顔かけの糸の數ほど生えてくれ。」とお呪ひの言葉を唱へました。

さうすると、忽ちみんなのちき後へ、大きな／＼大木が、一度にぎつしり生え延びて、瞬間に大きな／＼林が出來ました。

兵たいたちは、

「おやッ」と言つてまご／＼しながら、その木の間を、無理やりにくぐり抜けようともがきました。

王子と三人の家來とは、そのひまに、王女をつれて、一生けんめいに、どん／＼どん／＼、逃



三五

げ延びました。

みんなは、しばらく駆けつゞけにかけた後に、やつと安心して一と休み休みしました。

王子は、

「どうだ、まだ追っかけて来るか見て御覽。」と、火の目小僧に言ひつけました。

火の目小僧は、早速延び上つて向うを見ますと、兵たいは今やつと、さつきの林をくゞりぬけて、またどん／＼どん／＼と、砵烟を立て、駆けつけて来るのが見えしました。

王子は、

「では、ぐず／＼してはゐられない。さあ逃げよう。」と言つて、立ち上りました。

さうすると王女は、

「いえ／＼大丈夫でございます。もう少し休んで入らつしやいませ。」と言ひながら、目から涙を一としづ／＼流して、

「さあ、涙、大きな河になつてゐくれ。」と言ひました。

すると、忽ちそこへ大きな／＼大河が出来ました。

王子は、それを見ると、安心して、また王女の手を取つて運げて行きました。

みんなは、それからまた長い間、どん／＼どん／＼走りつゞけに走りました。そして、もうこれなら大丈夫だらうと思つて、しばらく途中で休みました。

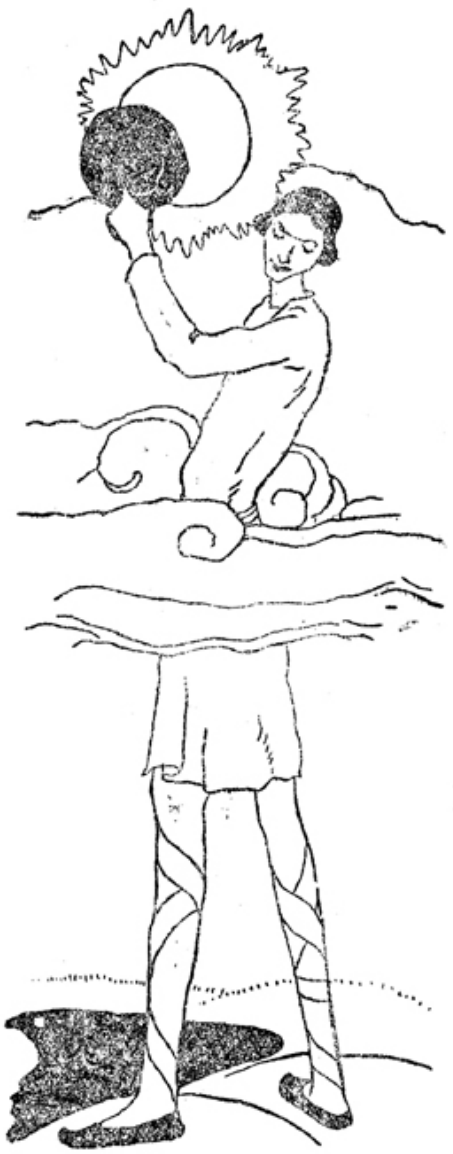
「どうだ、まだ追っかけて来るか。」と、王子はもう一度火の目小僧に見させました。

火の目小僧は、後を向いて爪立ちをしながら、

「あや、とう／＼あの河を渡つて、またど／＼追っかけてまゐります。」と言ひました。

王女はそれを聞くと、おど／＼して、

「あや／＼どういたしませう。もう私の力では、どうすることも出来ません。どうかして、この晝を夜にする工夫はないものでございませうか。」と言ひました。



すると長々は、

「あゝ、それならどうもありません。」と言ひながら、忽ち體をする／＼と延びしました。

長々は「あや」といふ間に、もう天まで延び上つてしまひました。

みんなは、びつくりして、何をするのかと、見てをりますと、長々は、高い／＼雲の中で帽子をぬいで、その帽子をひよいと、お日さまの片側へかぶせました。

すると下界は、王子たちのゐる方だけに光りがさすばかりで、兵たいが驅けて来る方の半分はふいに夜のやうに眞つ暗になつてしまひました。

王子たちは、兵たいが「あや／＼」とびつくりして、暗がりてまご／＼してゐる間に、

「さあ、走れ／＼。」と言ひながら、王女の手を取つて驅け出しました。

長々は、王子たちが、い／＼加減遠くまで逃げ延びたところを見すまして、ひよいと帽子をはづして、頭にかぶりました。そして一と足で一里跨げる、その長い／＼足で、ひよい／＼／＼と、瞬く間に王子の側へ追ひ附きました。

それから、また、みんなと一しよにどん／＼どん／＼走つて歸るうちに、やがて向うの方に、王子の御殿のある所が、見え出しました。

王子は、

「どうだ、兵たいはもう引き返したらうか。一寸見てくれ。」と、火の目小僧に言ひました。

火の目小僧は、また後をふり返つて、

「あや、また、ぢきあすこに砂煙が見えます。いやこれは油斷がならない。」と言つてあわて出しました。

すると、ぶく／＼が

「ぢやみなさんは構はずも逃げになつて下さい。私が一人こゝに残つて、ちやんとよくいたしますから。」言つて、王子たちを先に逃がしました。

ぶく／＼は、そのあとへ、一人でじい／＼と立ちほだかつたまゝ、ぶく／＼／＼と、見る間に大きな／＼大山のやうに脹れ上りました。そしてその大きな口をばくりと開けて、

「さあ来い。」と言ひながら、ゆ／＼と待ちかまへてをりました。

兵たいは「うわあ／＼」と聞の聲を上げて、死にものぐるひで驅けつけて來ました。皆は、かうなれば、たとへ火の中をもぐつてもあの王女を取りかへして戻せる、もし相手が王女を渡さないと言ふなら、すぐにあの町をぐるりと攻め圍んで、町中のものを一人も残さず切り殺してやらう。——かうみんなで腹を極めてゐるのでした。

間もなく兵たいたちは、ぶく／＼の口の眞ん前まで驅けつけて來ました。するとみんな火の子のやうにあわて切つてゐるものですから、ぶく／＼の大きな口を、町の入口の門と間違へて、片はしから、どん／＼／＼と、その口の中へ飛び込みました。

ぶく／＼は、その何千人といふ兵たいが、すつかりお腹の中へ這入つてしまふと、

「は／＼／＼、さあ、これでよし。」と笑ひながら、そのまゝ、のそり／＼と町の方へ歩いて行きました。

ぶく／＼は、それだけの兵たいを馬ぐるみお腹へ入れたのですから、少し歩き悪くはありましたが、それでも、大股にのつ／＼と歩いて、平氣で町の門をくぐりました。

町中では、王子が、うまく察すの番をし終せて、世界一の立派な王女をよ嫁に貰つて歸つて來

たといふので、だれもかれもみんな大よろこびで、わい／＼わい／＼躍りさわぎました。

王子は、ぶく／＼の姿を見ると、

「あ、歸つたか、そしてあの兵たいたちはどうした。」と聞きました

ぶく／＼は、にや／＼笑ひながら、大きなお腹をぼん／＼叩いて、

「この通りでございます。みんなこの中へ入れてしまひました。」と言ひました。

王子は、はつはと笑つて、

「もうい／＼から出してあやりよ。」

と言ひました。

「さうですね、兵たいや馬は中々一寸は消化れますまいな。あとで腹が下ると厄介ですから、出してしまひませう。」

ぶく／＼はかう言つて、わざ／＼町の真ん中の大きな廣場までのそ／＼歩いて行きました。

町中のものは、大きな／＼大山のやうな、大きな／＼大男が来たのでびつくりして、わい／＼言ひながら、みんなでぞろ／＼とその後へついて行きました。

ぶく／＼は廣場へ来ると、

「さあ、みんなどけ／＼、危いぞ／＼。」

と言ひながら、正面の大通りにたかつてゐる人を追ひ拂ひました。そして、両手で横腹を抑へて、

「ゴホン／＼／＼」と咳をしました。



しました。

町中（まちぢゆう）のものは、

「うわア〜」と面白（おもしろ）がつて、みんなて手を叩（たた）いて、はやし立てました。

ころがり出た騎兵（きへい）たちは、みんな死（し）んだやうに眞（ま）つ青（あ）な顔（かほ）をして、あとをも見（み）ずに、どん〜どん〜遁（に）けて行（い）きました。

ぶく〜は、

「ゴホン〜、ゴホン〜」と暖（あ）きつゞけに暖（あ）いて、とう〜何千（なんせん）人（にん）といふ騎兵（きへい）を一人（ひとり）も残（のこ）らずすつかり吐（は）き出してしまひました。

その一（い）ばんしまひに飛（と）び出した兵（へい）たいは、戸（と）まどひをして、ぶく〜の鼻（はな）の穴（あな）へ飛（と）び込んで、もが〜もがいてをりました。

ぶく〜は、

「え、面倒（めんどう）な奴（やつ）だな。」

と言（い）つて、クシヤンとぐしやみをしました。

するとその兵（へい）たいは、すんと鼻（はな）の穴（あな）から吹（ふ）き飛（と）ばされて、馬（うま）と一（いっ）しよにころ〜ころ〜轉（ころ）がりながら、大（おほ）あわてにあわて〜、みんなの後（あと）を追（お）つて遁（に）けて行（い）きました。

御殿（ごてん）では、早速（さつそく）、王子（わうじ）と王女（わうじよ）との御婚（ごこん）禮（れい）の式（しき）をあげることになりました。

それで、王女（わうじよ）の父（ちち）さまの王（わう）さまにも來（き）ていた〜かないといけな〜いといふので王子（わうじ）は急（いそ）いで、長々（ながなが）を、向（むか）うへへ使（つか）ひに出（だ）しました。

長々（ながなが）は、例（れい）の足（あし）でひよい〜ひよい〜と一度（いちど）に一里（いちり）づつ跨（また）いで、間（ま）もなく、ぢきに向（むか）うの王（わう）さまの御殿（ごてん）へ着（つ）きました。

行（い）つて見（み）ると、さつきの兵（へい）たいたちは、どん〜馬（うま）で遁（に）けて行（い）つたくせに、まだ一人（ひとり）も御殿（ごてん）へ歸（かへ）りついてをりませんでした。

長々（ながなが）は、先（ま）に着（つ）いたのを幸（さいは）に、王（わう）さまに向（むか）つて、兵（へい）たいの大將（たいしょう）の命（いのち）を許（ゆる）しておやりになるやうに、よく願（ねが）ひしてやりました。

それでない、大將（たいしょう）は、王女（わうじよ）を取りかへさないで空手（かたて）で歸（かへ）つて來（き）た罰（ばつ）に、きつと首（くび）を切（き）られるところでした。

王（わう）さまは、王女（わうじよ）のお婿（むこ）さんが、さういふ立派（りっぱ）な王子（わうじ）だったと聞いて、大（おほ）よろこびで、すぐにお供（とも）をつれて出（で）て入（い）らつしやいました。

それで、御婚（ごこん）禮（れい）の式（しき）も滞（とど）りなくすみしました。

王子（わうじ）をたすけていろんな大（おほ）手柄（て）をした、例（れい）のぶく〜と長々（ながなが）と火（ひ）の目小僧（めこぞう）の三人（さんにん）は、そのお祝（いわ）ひに、それは〜大（おほ）そうな御褒（ごほ）美（び）を貰（もら）ひました。（なほり）